

スンダ人とスンダ世界

村井吉敬*

The Sundanese and Their World

MURAI Yoshinori*

This essay is an attempt to discuss the ethnic character of Sundanese (*orang Sunda*) who mainly live in West Java. Although they are the second major ethnic group in Indonesia, it seems that their ethnic character is less conspicuous than that of the Javanese, Minangkabau or Bataks. The Sundanese have their own traditional world (*alam Sunda*) by which they are distinguished from other ethnic groups. The elements of *alam Sunda* are: (1) Sundanese language (*basa Sunda*), (2) distinctive legends, myths, folktales and *adat* (customary law), (3) a unique image of the dwelling area (*kampung*) and its surrounding landscape, which consists of dense forests in the mountain areas, hills and brooks around the *kampung*, rice fields (*sawah*, *serang*), palm trees and bamboo groves near the *kampung* and so on.

The Sundanese world is hierarchic. It has a

center and a periphery, defined in terms of social class and region. The center is the Priangan area, particularly Bandung, where historically the aristocratic and bureaucratic elites (*menak*) have been created by such outside powers as the Javanese and the Dutch. These elites are characterized by their ability to use refined language (*basa lëmès*).

On the other hand, the world of common people is the world of unrefined (*kasar*) language. Kabayan, a hero of folktales, is a typical character of the *kasar* world. This character also has the potential to overthrow the hierarchic Sundanese class society, because the majority of the Sundanese belong to the *kasar* world and, like Kabayan, they sometimes criticize and fight against the ruling class. In this respect such a character as Kabayan might exist among oppressed people all over the world.

はじめに

“ワルン・コピ・プランボルス” Warung Kopi Prambors という漫談 lelucon, lawak のグループの、南スマトラ州パレンバン Palembang でのライブショーの一場面をまず紹介しよう [Kasino; Dono; Nanu; and Hendro 1980 (?)]。

「バタック人 orang Batak がひとりでしたらどう思う？」

「ひとりで歌でもうたうさ。」

「ふたりだったら？」

「チェスを楽しむ。」

「3人では？」

「ダイヤモンド・ゲームだろ。」

「じゃあ4人なら？」

「トルトル遊びだな。」

「5人、6人以上になるとだな。……戸や窓をよく閉めておかねばならない。」(大笑)

「じゃあ、ジャワ人 orang Jawa がひとりでしたらどうなる？」

* 上智大学アジア文化研究所; Institute of Asian Cultures, Sophia University, 7-1 Kioi-cho, Chiyoda-ku, Tokyo 102, Japan

「ハトを鳴かして遊ぶさ。」¹⁾
 「ふたりなら？」
 「しらみとり。」
 「3人？」
 「ガムランを奏でる。」
 「4人になると？」
 「ワヤン・オラン(人間のやるワヤン劇)だろうな。」
 「5人以上となると、ジャワ島の外に移住 transmigrasi だ。」(大笑)
 「もし女房がまだいないのなら、スンダ人 orang Sunda を探せ。西ジャワの人だよ。」
 「どうして？」
 「スンダ人は praktis, manis, ekonomis ...sedikit berkumis (実用的で、可愛らしく、経済的で、.....ちょっと口ひげも生えている) だからさ。」(笑)
 「どうして実用的なんだ？」
 「スンダ人はいつも葉っぱを食べものに利用するからさ。」
 「ララブ・ララバン lalab-lalaban というやつだな？」
 「そう。だから米がとれないときでも、大して食うには困らないのさ。サンバル sambal (香辛料)でもあげて畑に放り出しゃ、それで生きていけるっていうわけだ。」(大笑)
 「キャッサバ芋の葉っぱも、パパイヤの葉っぱも、ジャンブー jambu (果実の一種)の葉も、バナナの葉っぱだって食べちゃうわけだ。」
 「ただ一つ食べない葉っぱがある。それは窓の葉²⁾ daun jendela だ。」(大笑)

- 1) シラコバト Streptopelia becaocto ないしベニバト Streptopelia tranquebarica に似た小型のハト perkutut を、鳥カゴに入れ、高い棹の先に吊すと、ハト同士が呼び合い美声を競う。ジャワでは多くの家でこのハトが飼われている。
- 2) 板でできた窓を daun jendela (窓の葉)という。

こうした民族(種族)間をめぐる笑い話 ethnical joke は、「多民族国家」インドネシアにはきわめて豊富にある。共通言語たるインドネシア語の話し方の性癖、発音のくせ、名前のつけ方、食習慣、一般的性癖等々において、どこかの種族が中心になって、他種族をひやかし、からかい、あるいはおとしめるわけである。インドネシアは公的には、1928年の「青年の誓い」Sumpah Pemuda が称揚したように「一国家、一民族、一言語」の国であるから、堅苦しい公の場で種族意識を発露することはタブーでさえある。しかし、それぞれの生活の場においては、陰に陽に種族意識が顔を出す。

ジャカルタ中央に堂々と聳えるあの独立記念塔 Monas, Tugu Nasional と、その内部の荘厳たる「統一国家」をシンボライズした種族のしかけ、これは統一国家形成の強固な意思のあらわれであるとともに、統一を脅かしかねない多民族エネルギー拡散への監視の役割をも担わされたものと思われる。もちろん、統一を脅かすものは種族文化だけではないし、ごく最近にそのような兆候はない。だが、インドネシア国民の多くは、その日常性において種族・地方文化を背負い、公の場においてインドネシア文化を背負うという、二重文化・二重言語の状況のなかに生きている。この二重性がうまく調和し、強固な統一国家の形成にのみ向かうとだけは言い切れない。1950年代の多くの地方叛乱はまだそれほど過去のことでないのである。〈インドネシア性〉と〈地方性〉、あるいはより普遍的タームにおき換えるとすれば〈中枢〉と〈周辺〉という問題は、解決済みの問題とはいえない。とりわけ、現今の〈開発政治〉の流れのなかで考えた場合、〈地方性〉〈周辺性〉の問題がクローズアップされてくる。これは単なる並列的な種族文化の問題ではない。

さて、本小論は首都ジャカルタをとり囲む

形で存在する〈スンダ世界〉というものを考えてみたい。ジャワ人の世界ほど強い求心性も中枢意識もない、かといってミナンカバウやバタック人の世界ほどの自己主張もない。どちらかというところのないのがスンダ人の世界であると考えられているように思われる。ここでは、他種族世界との比較を論ずるのではなく、スンダ人 orang Sunda のつくっているスンダ世界 alam Sunda というものが、一体どういうものなのか、そのあらましを述べ、さらにそのスンダ世界のなかの中枢と周辺の問題に触れることによって、他の種族世界との比較の視座を提供し、さらにインドネシアとは何か、ということを考える際のささやかな素材を提供できればと考えている。なお、ここで考察されるスンダ世界は、主として、バンドンを中心としたプリアンガン Priangan 地方であることをお断りしておきたい。また社会経済構造の分析はいずれ稿をあらため言及するつもりなので、本稿は序論的な性格のものであることをお断りしたい。

I スンダ世界のあらまし

スンダ人は今日の行政区分でいえば、主として西ジャワ州 Propinsi Jawa Barat および首都ジャカルタ特別区 Daerah Khusus Ibu Kota Jakarta, DKI に居住している。種族集団としてのスンダ族 suku Sunda, sukubangsa Sunda がどれくらいの数であるのかは、今日の人口統計からは判明しない。なぜならば、インドネシア共和国が独立して以来、その国勢調査（1961年、71年および80年）においては、外国籍の者を除いて種族的背景が調査されたことがなかったからである。したがって、私たちが利用する全インドネシア・レベルでの種族別人口統計は、オランダによってなされた1930年のセンサスに遡る以外に

ない [Hugo 1978: 27-28]。1930年の統計によれば、蘭領インドの総人口は約6,073万人で、このなかにはヨーロッパ人24万人、中国人123万人をはじめとした外国人が159万人（総人口の2.62%）含まれている。土着人口 inheemsche bevolking は5,913万8,067人であった。うち、スンダ人 Soendaneezen として分類されている者の数は859万4,834人（総人口の14.2%）で、ジャワ人の2,781万人（45.8%）につぐ第2の種族集団となっている [Nederlandsch Indië 1940: 5-13]。³⁾ いま、当時の行政区分である西ジャワ州 (Provincie West-Java, ここにはバタビア理事州 Residentie Batavia も含まれている) に住む人のうち、スンダ人がどのくらいのパーセンテージを占めるかをみてみよう。西ジャワ州の総人口は約1,140万人（総人口の18.8%）、うち外国人は36万人弱（3.2%）、ジャワおよびマドゥラ島以外のいわゆる外島出身者は約5万人（0.4%）であり、スンダ人は全西ジャワ人口の72.6%、828万人ほどを占めていた。したがって、スンダ人総人口859万人のうち、96%が西ジャワ州に居住していることにもなる。

1980年現在、西ジャワ州およびジャカルタ特別区の総人口は3,396万人となっており、これは50年前の3倍近い数である（表1を参照）。これは明らかにジャカルタの急膨張の結果で、スンダ人人口の急増ではない。現在、スンダ人がどのくらいのパーセンテージを占めるかは、先に述べたように明らかではない。一番単純に、インドネシア人総人口成長率とスンダ人人口成長率が比例関係にあると考えた場合、スンダ人の人口は約2,090万人ほど

3) その他、マドゥラ人431万人（7.1%）、ミナンカバウ人199万人（3.3%）、プギス人153万人（2.5%）、バタック人121万人（2.0%）、バリ人111万人（1.8%）、バタビア人98万人（1.6%）、マレー人95万人（1.6%）、バンジャル人90万人（1.5%）、アチェ人83万人（1.4%）などとなっている。

表1 西ジャワ州の人口の推移
(単位: 1,000人, %)

	1930年	1961年	1971年	1980年
西ジャワ州	10,864 ⁴⁾	17,615	21,624	27,454
ジャカルタ	533	2,973	4,579	6,503
ジャワ・マドゥラ	41,718	63,059	76,089	91,270
インドネシア	60,727	97,085	119,208	147,490
西ジャワ州の人口比	17.9	18.1	18.1	18.6
西ジャワ州およびジャカルタの人口比	18.8	21.2	22.0	23.0

注 1) 行政区分上ジャカルタが含まれているが、ここではジャカルタの人口を除いた数値。

出所: Nederlandsch Indië [1940]; Indonesia, Biro Pusat Statistik. 1981. *Penduduk Indonesia 1980 menurut Propinsi dan Kabupaten/Kotamadya*.

ということになる。もちろん、他種族との婚姻により単一種族へ規定してゆくこと自体が困難になるという事情もあるし、種族別の人口成長率に相違があることも想定されるので、安易な断定はできない。ただ、スダ人が1980年現在およそ2,000万人内外、総人口に占める比率13~15%ほどであるといっても、それほど大きな間違いではないだろう。

これまで、ジャカルタと西ジャワ州というものを合わせてスダ人の数を考えてきたが、スダ人は地理的な西ジャワに一律な割合で存在しているわけではない。たとえば、ジャカルタの場合、1930年には、スダ人は全人口の25.4%(13.5万人)で、バタビア人の36.1%(19.3万人)より少なかった。⁴⁾ ジャカルタ以外の西ジャワを見回すと、北海岸寄りの地方は、明らかにスダ人の比率が低い。すなわち、最西端のバンテン Banten 地方で

4) この数値はバタビア中心部 (Batavia+Meester Cornelis) のもの。バタビア人、スダ人について、人種構成は中国人14.7%、ジャワ人11.0%、ヨーロッパ人7.0%などとなっている。周辺部を含めた大ジャカルタ Jakarta Raya の人種構成になると、バタビア人の比率は53.2%、スダ人19.1%、中国人11.2%、ジャワ人7.6%となる [Castles 1967: 166]。

はジャワ人が半数以上になり、東側のインDRAMAYU, チレボン Cirebon では、ジャワ人が圧倒的多数となる。とくに、インDRAMAYU 県の場合、90%近くがジャワ人である。これに対して、バンドンを中心としたプリアンガン地方は、スダ人が90%ないしそれ以上を占めている。とくに、スカブミ Sukabumi 県、チアンジュール Cianjur 県、ガルート

Garut 県、スメダン Sumedang 県、チアミス Ciamis 県は95%以上がスダ人である (図1参照)。

現在のスダ人の居住分布も、1930年当時と比較して、大都市 (ジャカルタおよびその周辺、バンドン、ボゴール Bogor など) を除いては大きな変化はないものと思われる。ジャカルタは首都であるという性格上、そして人種構成の点からもスダ地方 Tanah Pasundan, Tatar Sunda に入れられない方が適当だと思われるが、スダ人の居住者が相当に多いということだけは銘記しておくべきであろう。キャスルズ Castles, Lance の推計では、1961年のジャカルタには約95.3万人のスダ人が居住しており、これはジャカルタ総人口の32.8%を占めていることになる [Castles 1967: 187]。1930年には13.5万人、25.4% (ただし大ジャカルタでは15万人、19.1%) であったから、総数で7倍近くも増え、ジャカルタの第1の人種集団になったわけである。なお注目すべきことは、キャスルズの推計によれば、61年ジャカルタの第2の人種集団はジャワ人で、総数73.8万人、比率25.4%となっている。ジャカルタの土着の民であるバタビア人は、少数者になりつつあるのであ

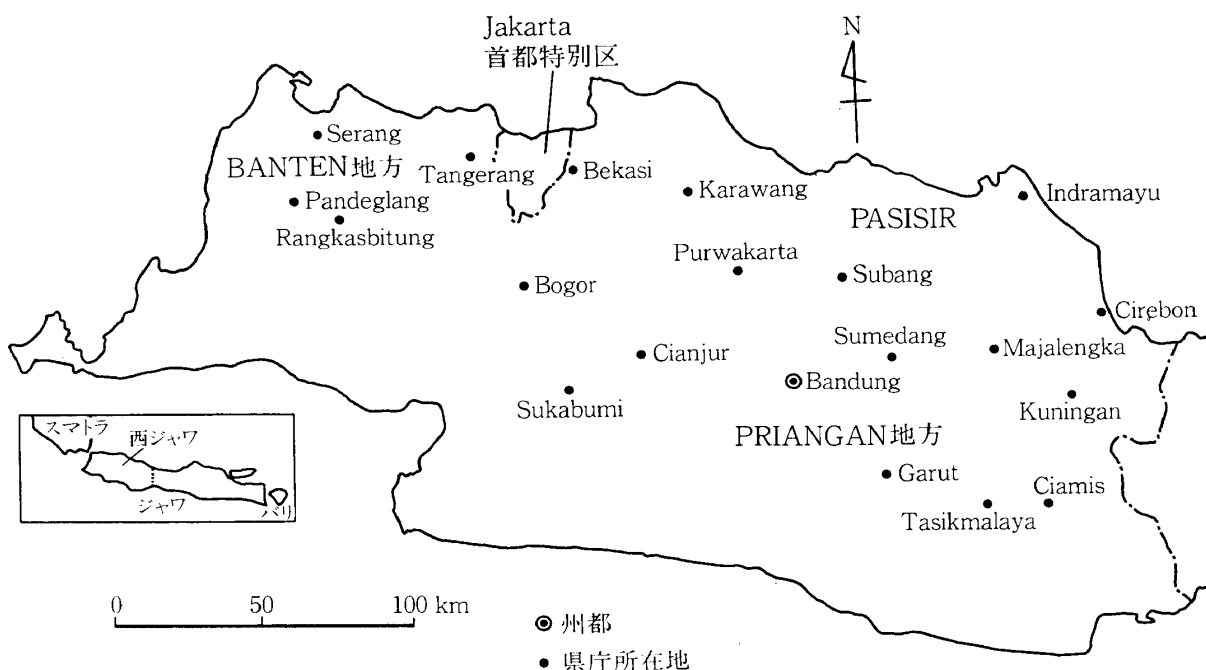


図1 西ジャワ州

る。その後20年でジャカルタの人口はさらに2倍以上になった。おそらくジャワ人が第1の人種集団になり、ジャワ人とスンダ人を合わせれば70%以上になっているのではないだろうか。

われわれはスンダ人が最も密に居住している地域として、バンドンを中心としたプリアンガン地方を、スンダ世界の中心地域と考えることができよう(たとえば Palmer [1967: 299])。これに対してチレボン、インDRAMAYUの北海岸 Pasisir 地方は、むしろジャワ人が優勢の地域である。⁵⁾ 西ジャワと中ジャワの南の境をなす川(Citanduy 川, Ciseel 川)およびプリアンガン山地というものが、スンダとジャワの融合を妨げていたのだろう [Schrieke 1956: 104]。ただ、北海岸寄りには川(Cilosari 川)はあるものの、平原でしかもジャワ海の航海が容易であることもあって、ジャワ人が多数住みつくようになったものと思われる。一方、最西端のバンテン地方は、南

と北とでスンダ人とジャワ人が住み分けているといわれる。南バンテンはスンダ人が多く、北バンテン(セラシ Serang, アニエル Anyer など)はジャワ人地域である。ここに住むジャワ人は、もともとは中ジャワのデマク Demak や、西ジャワ東北端のチレボンから移り住んできた人々で、純然たるジャワ人であるというよりも、スンダ人、マレー人、ブギス人、ランボン人などとの混血したジャワ人であるという [Kartodirdjo 1966: 30]。ここで話されることはバンテン・ジャワ語ともいわれるし [Palmer 1967: 299]、スンダ人たちは「粗野なスンダ語」Sunda kasar ともいう。以上の考察からも明らかのように、スンダ人は西ジャワ全域に居住してはいるが、中心はあくまでもプリアンガン山地で、ここを中心にスンダ人の世界が展開されてきたということができよう。

スンダ人とは「日常生活のなかで代々スンダ語およびその方言を母語として使用し、タナ・パスンダン (Tanah Pasundan) ないしタートル・スンダ (Tatar Sunda) と呼称される

5) チレボン地方ではスンダ語がより多く使用されているともいう [ハルソヨ 1980]。

こともある西ジャワ地方を出身地および居住地とする者」とハルソヨ Harsojo は定義している [ハルソヨ 1980: 369]。しかし、スンダ人がつくり出すスンダ世界 *alam Sunda* という場合、言語だけの広がりとはいえない。日常的にスンダ人が、自分たちの生活空間を *alam Sunda* ということばで表現することはあまりないように思われるが、自分たちの住まう世界総体を象徴的にせよ表現しようという場合、*alam Sunda* ということばに行きつくように思われる。その意味で、*alam Sunda* というのは話しことばではなく、書きことばである。おなじ「世界」をあらわす *dunia* ということばは用いない。*Alam* ということばはアラビア起源のことばだが、それは、この世・身近な世界 (*dunia*) や王国 (*kerajaan*) だけでなく、自然・大地 (*bumi*) を含んだ森羅万象を意味している。スンダ語には“時代” (*zaman*) という意味も含まれている [Satjadi-brata 1950: 16; 1954: 20; Zain 1960: 26]。

Alam Sunda をあえて分解しようとしたら、おそらくつぎのような要素に分解されるのではないだろうか。

(1) スンダ語 (*basa Sunda*) を話し、そのことばに規定されて、たちい、振る舞う (*tingkah polah*) 世界。

(2) イスラムが大きく表面を覆っているとはいえ、スンダ地方特有の神話・伝説・慣習 (*adat*) を継承しつつ、独自の文化を育んできた世界。

(3) 居住空間とそれをとり巻く自然景観への、ある程度共通したイメージがなりたっている世界。

この三つの要素のそれぞれを考えると、ことばを除いては、とりわけスンダ世界の固有性は主張できないことになるかもしれない。しかし、スンダ人の心のなかでは、分かちがたくこれらの要素が組み合わさって自分たち

の世界が存在しているものと思われる。⁶⁾

以下、それぞれの要素をもう少し具体的に記してみたい。

II スンダ世界の中味

はじめにスンダ人、とりわけプリアンガン山地の地方に住む人びとの居住・自然空間についての一定のイメージについて述べよう。

スンダの笛 *suling* と琴 *kacapi* に合わせて哀調を帯びたトゥンバン・スンダ *Tembang Sunda* (発祥地にちなんだチアンジュラン *Cianjuran* など、いくつかの類型がある [Soepandi, Atik; and Enoch Atmadibrata 1976: 36-37])⁷⁾ の歌声が聞こえてくるとき、スンダの人びとの心の琴線は、それに共鳴するに違いない。村のカンポン *kampung* でも、町の狭い路地でも、結婚式や割礼などの儀式があれば、あるいは今日ではラジオのローカル放送から、カセット・テープレコーダーから、この歌声と楽器の音が聞こえてくる。外部の者の印象にすぎないが、それはまさにスンダの自然と溶け合った音である。うたわれる詩そのものも自然の美しさであり、女と男の恋の切なさ、煩悶、ときめきなどである。

ルムブル・クリン *lembur kuring* (わがふ

6) この点については、スンダ人文学者 Saini K. M. 氏、および東京学芸大学大学院に留学中のスンダ人 Jonjon Johana 氏の示唆によるところが大きい。

7) スンダ歌謡 *Tembang Sunda* は、もともとは、ワワチャン *Wawacan* とかベルック *Beluk* と呼ばれる歌を下敷きに発展したものといわれる。今日、最もポピュラーなチアンジュランは、チアンジュールの県知事がダレム・パンチャニティ *Dalem Pancaniti* だった時代に、パントゥン師 *juru pantun* のキ・ジャヤラヒマン *Ki Jayalahiman* という人物が歌の案内役として琴をひくスタイルをもちこんだという。これに笛が加わり今日の形をとったのは、1920年ごろのことといわれる [Soepandi, Atik; and Enoch Atmadibrata 1976: 34-37]。

るさと・私の村)とスンダの人びとがいうときのルムブルは、自然や歌声や楽器の音や田や畑や家をひっくるめた〈ふるさと〉である。その lembur は、もちろん人によって多少のイメージの違いはあろう。しかし、とりわけプリアンガンの山地に住まう多くのスンダ人にとっては、lembur とは、青い山並みを見渡せる、あるいは小高い丘の麓に広がる田圃や畑、近くを流れる川、といった自然の景観に包まれた人びとの営みすべてを指しているものと思われる。山と川とは景観上、欠かせぬ要素としてあるだろう。ちなみに、プリアンガン地方の中心バンドンの東の隣県スメダン県について、県の地名、郡の地名、合わせて14、その他、村 desa ないしカンポンの地名73 (これはランダムに選ぶ)、合計87カ所の地名を調べてみると、実にその3分の1以上にあたる30の地名は Ci という接頭語を有していた。Ci というのは cai (水) の略語である。当然のことながら、人びとの生活空間が水や川に密着してあるということの証左であろう。これに地形や動植物に由来する地名を加えると、全地名の60%近くになる。これに対して、歴史的由来のある地名、人の生活と関わりのある地名は25カ所であった。

プリアンガン地方はもともと熱帯森林に覆われた奥深い山岳地帯で、人びとは焼畑移動農耕民ないし遊牧民だったともいわれる [Adiwilaga 1975: 55]。多くのスンダ人は、比較的最近まで、あるいは少数の人びとはいまなお、圧倒的に迫りくる自然の重みを感じながら生きてきている。だからこそ、人の生活空間として適した青い山並みを見渡せる、耕作可能な空間と、そこに家々がひっそりとたたずむカンボンとに、限らない親しみを感じるのだろう。もっとも、プリアンガン地方で大規模な水田耕作が始まったのは19世紀以降であるといわれる [ibid.: 57] ので、おだやかな田圃、山並み、カンボンという景観

は、昔からのスンダ人のイメージであるとは断定できない。

つぎに、スンダ人がスンダ世界に固有と考える神話、伝説の世界について考えてみたい。スンダ地方は「イスラムへの厳格な帰依」 [Hugo 1978: 28], 「正統派イスラムの中心」 [Benda 1963: 53], 「バンテンやプリアンガンでは、プリアイは (アバンガンでなく) サントリ santri であった」 [Kartodirdjo 1973: 116] などの指摘にみられるように、(ジャワ社会と比べて)イスラム信仰に熱心な地域であるとされてきた。とくに、歴史的諸事件、たとえば1888年のバンテンの農民叛乱、1920年代のプリアンガンにおけるサレカット・ヒジョウ Sarekat Hijau, Sarekat Hedjo の共産党襲撃事件、日本軍政期のタシクマラヤのシンガバルナにおける抗日叛乱、さらには独立戦争期から60年代はじめまでプリアンガン山地で展開されたダルル・イスラム Darul Islam 運動などの諸事件が、“強固なイスラム”と結びつけられて語られるため、スンダ世界は、あたかもイスラム一色で塗りつぶされているかの印象を与えている。

たしかにメッカ巡礼に出かけた者の数は、西ジャワの場合、中東部ジャワに比べれば多い。たとえば1876~1888年までのハジの数は、ジャカルタを含んだ西ジャワは1万8,113人と、中ジャワの9,247人、王侯領902人、東ジャワの1万1,786人を大きくひき離している [Svensson 1983: 116]。1926~1935年のあいだ、西ジャワは年平均6,050人のハジを送り出しているが、他のジャワ地方は平均3,719人にすぎず、人口10万人あたりでも西ジャワが25人であるのに対し、他のジャワ地方は14人にすぎなかった [後藤 1972: 21]。だが、これらのことだけから果たして「イスラムが強い」ということを一般化できるだろうか。

いま1955, 71, 77, 82年の、独立後4回の国政選挙の政党支持率をみてみよう (表2を

表2 総選挙の政党別得票率

(単位：%)

		西ジャワ	ジャカルタ	中ジャワ	ジョクジャカルタ ¹⁾	東ジャワ	インドネシア
1955年	PNI	22.1	19.6	23.5	—	22.8	22.3
	マシュミ	26.4	26.0	10.0	—	11.2	20.9
	NU	9.6	15.7	19.6	—	34.1	18.4
	PKI	10.8	12.0	25.8	—	23.2	16.4
	その他	31.1	26.7	21.1	—	8.7	22.0
1971年	GOLKAR	76.1	46.6	50.3	63.3	54.9	62.8
	イスラム諸政党 ²⁾	20.6	34.9	29.7	21.3	39.2	27.2
	非イスラム諸政党 ³⁾	3.2	18.6	21.0	15.0	5.7	10.0
1977年	GOLKAR	66.3	39.1	52.6	56.6	59.0	62.1
	PPP	28.5	43.7	28.3	23.2	35.9	29.2
	PDI	5.2	17.2	19.1	20.2	5.2	8.7
1982年	GOLKAR	63.2	44.7	60.5	60.5	56.5	64.1
	PPP	27.3	39.4	27.7	23.3	36.8	28.0
	PDI	9.5	15.9	11.8	16.2	6.7	7.9

注 1) 1955年の得票率は中ジャワに含まれる。

2) このなかには、インドネシア・イスラム同盟党 (PSII), ナフダトゥール・ウラマ党 (NU), ムスリミン党 (Partai Muslimin), イスラム・タルビヤ連合 (PERTI) が含まれる。

3) このなかには、カトリック党, インドネシア・キリスト者党 (PARK-INDO), ムルバ党, インドネシア国民党 (PNI), インドネシア独立擁護連盟 (IPKI) が含まれる。

出所: Indonesia, Departemen Penerangan. 1956. *Daftar Hasil Pemilihan Umum DPR*; —, Lembaga Pemilihan Umum. 1971. *Daftar Pembagian Kursi, Hasil Pemilihan Umum Anggota DPR Tahun 1971*; *Kompas*. June 9, 1977; May 16, 1982.

参照)。選挙制度そのもの、政党のあり方が55年、71年、77年で大きく変化させられているため単純な比較はできないが、イスラム諸政党（55年はマシュミ党、ナフダトゥール・ウラマ党 NU がイスラムの二大政党、71年は注2にあるように4党合計、77年からはイスラム諸党は開発統一党 PPP に糾合された）の西ジャワでの得票率だけを参考程度にみとめることにする。ここで判明することは、イスラム改革派と呼ばれるマシュミ党が55年時には他地域よりかなり強力であったという程度で、71年以降の選挙では西ジャワの「イスラムの強さ」はほとんど証明できない（マ

シュミ党自体、1960年に解散させられている）。むしろ東ジャワの NU の「強さ」の方がより顕著であるといえよう。ただし、若干注目すべきことは、バンテン地方においては、55年総選挙でマシュミ党が35.8%の得票をしており、NU と合わせると49.2%に達し、かなり強いイスラム地域であることが想像できる。77年の総選挙でもバンテン地方の中心であるセラン県では、イスラム系の開発統一党が、実に54.6%の得票率を得ている。プリアンガンではダールル・イスラムの本拠地であったガルート県、タシクマラヤ

Tasikmalaya 県で開発統一党は40%以上の得票を得ている。政党支持とイスラムが「強い」かどうかということは、単純には割り出せないにしても、これまでの選挙結果からすれば、バンテン地方やプリアンガンの一部では、たしかにイスラム政党への支持が高く、イスラムに熱心だといえそうだが、それをもってスダ世界はイスラムが強固な世界とは言い切れないように思われる。

プリアンガンの多くの人びとは、たしかにイスラム教徒ではあるが、同時に、古くから伝わるイスラムとは無縁の神話・伝説にも、いまだに慣れ親しんでいる人びとである。あ

らたまった定義によれば「スンダ人はイスラム帰依者ではあるが、すでにヒンドゥーや仏教の信仰と混淆してしまった土着 asli の基層的な信心 kepercayaan が、まだ強く人びとを捉えている」[Prawirasuganda 1964: 8]ということになるだろう。ヒンドゥーのまだ強かった時代（16世紀以前）のプリアンガン地方の歴史は判然としない部分が多いが、ヒンドゥーの影響を強く受けた神話・伝説・物語 (carita, dongeng, legenda) は、いまでも人びとによって語り継がれている。プリアンガン地方の創世を伝える「サンクリアン物語」Carita Sangkuriang, 神々の世界からおりてきた黒猿が王女を救い国を治めるといふ「迷える黒猿の物語」Carita Lutung Kasarung, 虎に化身するシリワンギ王 Prabu Siliwangi の伝説, 超能力 (sakti) をもつ偉大なパジャジャラン Pajajaran 王の伝説, さらには結婚式や割礼などの儀式の夜に上演される人形ワヤン劇 wayang golek で展開されるストーリーの数々, これらはスンダの人びとの心のどこかに根をおろしたものであろう。稲の女神であるニ・ポハチ Nyi Pohaci, あるいはニ・サンヒアン・スリ Nyi Sanghiang Sri, 貴公子サンクリアン, その母ダヤン・スンビ Dayang Sumbi, 黒猿 Guru Minda に救われる王女プルバ・サリ Purba Sari, 意地悪な姉プルバ・ララン Purba Rarang, こうした人物像も人びとの心のなかに影を落としていることだろう。⁸⁾ 男の神々 dewa-dewa, 女の神々 dewi-dewi のほかに、サン・イダジル Sang Idajil, サン・カラブアト Sang Kala-

8) ここでは論じないが、スンダの伝説には外から来たヒンドゥー系支配層と、土着スンダ人の争いを扱ったと思われるものが数多くある。たとえば、サンクリアン伝説におけるガルガ王は明らかにヒンドゥーの支配層で、おそらくジャワのヒンドゥー王朝を意識したものと思われる。また、同伝説における豚とか犬といった動物は異種族をあらわしていると思われる。

buat, サピ・グマラン Sapi Gumarang, クンティアナ Kuntianak, 豚のお化け hantu babi, 魚のお化け hantu belukang 等々, 悪霊, お化けもたくさんいる。土着の民間信仰とヒンドゥー・仏教的要素が交じり合い, その上にさらにイスラムが覆い被さって, スンダの人びとの心の核が形成されてきたのである。風土的条件に民間信仰, ヒンドゥー・仏教的要素, そしてイスラムが加わるということにおいて, スンダ世界はすでに独自の世界であるともいえるが, その独自性を決定的なものにしているのは, やはり言語であり言語の繰り広げる世界であろう。

スンダ語は, ジャワ語における「優雅なジャワ語」(クロモ krama) と「粗野なジャワ語」(ンゴコ ngoko) の二重性 [土屋 1983: 24-26] に類似する, lēmēs (halus)—kasar の世界を有している。あるいは lēmēs と kasar のあいだに panēngah (優雅でも粗野でもない, ふつうのスンダ語) を入れることもある。スンダ語辞典の編纂者である Satjadi-brata は lēmēs—panēngah—kasar の違いを, つぎのように述べている。

敬意をあらわすためのことばをスンダ語では basa lēmēs と呼ぶ。敬意を表するための lēmēs と, あらわされる場合の lēmēs は, しばしば異なっている。たとえば abdi nēda (私はいただきます) と, gamparan tuang (貴方は召しあがる) という場合, nēda も tuang もともに〈食べる〉という意味だが, 両語とも敬意を示す lēmēs である。……

たとえば, われわれが, 敬意をあらわす必要のない人に話をする場合は, panēngah と呼ばれることばは使ってもよい。それには dahar (食べる), sare (寝る), mulang (帰る), panon (眼), sirah (頭), hilang (死) などのことばがある。これらのことばは, 独身の若者や子供に対しても使える。

怒りをあらわすためには特別なことばがある。……これらのことばは、たとえ動物に対してであっても、めったには使わない。この範疇のことばを *kasar pisan* (大変に粗野な) という。

多くのことばは *basa kasar* と呼ぶ。もちろん、これらのことばは必ずしも「粗野な」性格であるとは限らない [Satjadibrata 1950: 8-9]。⁹⁾

スダ世界において、*lēmēs* な言語を情況に応じて正しく使いこなせるかどうかということは、社会階級的に、それなりの意味をいまだにもち続けていると考えられる。社会階級および地域と言語秩序が歴史的にどのように、どの程度の強さで形成されたかは、今後の研究課題であろう。ただ、推論されることが2点ある。第1は、スダ語世界における序列性はもともと(といっても、いつの時代までとは限定できないが)あったにしても、外側から強化されたのではないかという点である。外側からというのは、一つは中ジャワに本拠をもったマタラム王国のクラトン(宮廷)文化である。17世紀にマタラムのスルタン・アグン Sultan Agung が、バンドン一帯をその領地に治めブパティ *bupati* をおいたとされているし [Basoeni 1975]、また19世紀にはスメダンの貴族階級(一般にメナック *menak* と呼ばれる)とソロ、ジョクジャカルタの貴族階級のあいだには親族関係があったともいわれる [ハルソヨ 1980: 370]。もう一つはオランダによる植民地支配である。メナックなるスダの貴族階級が存在したにしても、その地位なり範囲を確固たるものにするうえで、植民地支配が相当な影響を与えた

であろうことが想像される。すなわち、メナックという場合、人びとの実感では「オランダ語学校に入れる階層」、したがって官吏になりえた人びとである。官吏の範囲はおそらく郡長 *camat* クラスまでで、それよりローカルな村長はメナックには入っていなかったようだ。もちろん、官吏以外に、医師や学校の教員の一部もメナックに入っていた。メナックの基盤自体スダ社会内部に求められるだろうが、それを強化してゆくうえで、植民地官僚制の果たした役割を見逃すことはできない。実際、*lēmēs* なスダ語は、かなり学習しないと習得が難しいという。学校であれ家庭であれ、こうした学習の機会をもちうること自体が富裕な階級の証しであるし、富裕なればこそ、*lēmēs* なことばを習得し、自らを権威づけることにもなるわけである。こうして、たとえ〈外力〉を借りたものであれ、スダ語世界の序列性と社会階級序列とが相補的に強め合う関係ができあがり、そこに一つの階級的中枢がスダ世界に形成されたのではないか、というのが第1の推論である。

第2は、スダ語の地域的序列である。ハルソヨは〈スダ語の洗練度〉ということばで、チアミス、タシクマラヤ、ガルート、バンドン、スメダン、スカブミ、チアンジュールといったプリアンガン地方が「純粋かつ洗練されたスダ語が使われている」としている [同上論文: 369]。これに対して、バンテン、ボゴール、カラワン *Karawang*、チレボンで使われるスダ語は「あまり洗練されていない」という。文化や地域に優劣はあろうはずはないにしても、實際上、プリアンガンを中心としたスダ語こそが〈正統〉であるとの意識が、スダ世界一帯に形成されてきた。これも、おそらく、ジャワ文化やオランダ文化の外側からの地域的偏在を伴った移入のされ方と関係があるだろう。西ジャワの北海岸は、ジャワ人移民が多く、しかもそのジ

9) Satjadibrata は正確には、スダ語をつぎの五つの段階に分けている。(1) *lēmēs pisan*, (2) *lēmēs*, (3) *panēngah*, (4) *kasar*, (5) *kasar pisan*. *Lēmēs pisan* は王などの階級の高い者に対して用いられることばであるという [Satjadibrata 1950: 8-9]。

ジャワ人は、ジャワ社会ではいわば辺境の、やはり北海岸住民で、イスラムにいち早く帰依した人びとである。プリアンガンは地理的理由もあって、イスラムが入ってくるのは、北海岸よりも遅れた。オランダ植民地化過程のなかでは、オランダはイスラムに手こずっている。プリアンガン一帯を植民地の後背地としてゆくうえで、ともにイスラムを異化するという点で、あるいは一種の共鳴関係がなりたったかもしれない、というのが第2の推論である。その中枢として利用されたのがバンドンである（バンドンの形成については、村井 [1983] を参照）。

III スンダ世界の中枢と周辺

1983年3月11日の国民協議会 MPR 総会ではスハルト大統領を4選するとともに、副大統領として、新たに会計検査院 BAPEKA 総裁の地位にあった退役将軍ウマル・ウィラハディクスマ Umar Wirahadikusumah を副大統領に任命した。スンダ人としては初の副大統領である。¹⁰⁾ もともと中央政界へのスンダ人の進出は、ジャワ人やミナンカバウ人、バタック人などに比べて劣勢であったといわれている（たとえば、後藤 [1972: 30-33]）。現政界においても、アリ・サディキン元ジャカルタ知事やアミル・マフムド国民協議会議長（前内務相）など、スンダ人で全国に知れ渡った政治家はかなり限られている。ウマル・

ウィラハディクスマとて、それほど名が知れ渡った人物ではなく、副大統領候補にスハルトがノミネートしたときでさえ、「意外」との受けとめ方が一般的だったという [Redaksi Tempo 1983a: 12-13]。ここでは、スンダ人の要人 tokoh と目されるウマル・ウィラハディクスマをとりあげ、スンダ人社会の中枢にある背景を考察してみる。

ウマル・ウィラハディクスマが副大統領候補として登場したときの *Tempo* (『テンポ』) 誌の人物紹介は、スンダ社会を考えるうえで参考になる。スンダ世界とそこを足がかりに、いかにより中枢の（この場合インドネシア）世界に到達したかということが示唆されているからである。

この記事は「スメダン出身の身ぎれいな人物」Orang Bersih dari Sumedang という見出しで始まる。その下に3行のリードが書かれている。

「ウマルはサンバルとラブを好み、¹¹⁾ PKI（インドネシア共産党）の残忍さに涙する。青年のころは喧嘩の名手 jago。質素な生活をするこの大物 tokoh は“身ぎれい”で寡黙な人だが仕事好き」 [Redaksi Tempo 1983b: 15]。

ウマルは1924年、プリアンガンの懐、スメダン県シトゥラジャ Situraja に生まれた。シトゥラジャは小高い山に囲まれ、きれいな川も流れる、典型的なプリアンガンの田園地帯である。「わがふるさと」lembur kuring ということばをスンダ人ならば思い浮かべることだろう。ただ、ウマルはメナックの家系に生まれた。父はチアウィ Ciawi（タシクマラヤ県）のウェダナ wedana¹²⁾ を務めた人物、

10) 共和国独立後の大統領（スカルノ、スハルト）はいずれもジャワ人、副大統領はハッタ Hatta, Muh. (1945～1956年)がミナンカバウ人、ハメンク・ブオノ Hamengku Buwono IX, Sri Sultan (1967～1973年)がジャワ人、アダム・マリク Malik, Adam (1973～1983年)がバタック人であった。なお1945～1965年までに、名目的にせよ実質的にせよ13人の首相経験者がいるが、スンダ人首相はジュアンダ Djuanda Kartawidjaja だけであった [Finch, Susan; and Lev, Daniel 1965]。

11) 生野菜にサンバルをつけて食べるのは、スンダ人の好む食習慣。本論冒頭の漫談を想起された。

12) Wedana は、Kabupaten (県) と Kecamatan (郡) のあいだにあった、かつての行政単位 Kewedanaan の長にあたる役職。

1番目の母も2番目の母もメナックの出であった。だからこそ、彼は ELS (Europesche Lagere School, ヨーロッパ下級学校) および MULO (Meer Uitgebreid Lager Onderwijs, 上級学校) で教育を受けられたのである。日本軍政下において郷土防衛義勇軍 PETA に入り、軍事訓練を受けたことが、その後の軍人の人生を決めている。45年9月には、直ちに独立軍たる人民治安軍 TKR に加わり、以後、シリワンギ師団において独立戦争を闘い、のち国軍幹部への道を登りつめている。もし、今回副大統領に選出されることになった要因を探るならば、65年9月30日事件の際にジャカルタ軍管区司令官の立場にあり、すぐさま陸軍戦略予備軍 KOSTRAD 司令官だったスハルト少将(当時)を補佐し、共産党弾圧で手柄をたて、スハルトの覚えがめでたかったことにあるだろう。彼は「敬虔なイスラム教徒」といわれる一方、何か難しい問題に直面すると「ふるさとシトウラジャの母親の墓をお参りする」ともいう。かつてウマルは“最もよいインドネシア語を話す10人”のひとりに選ばれたこともある。

ウマル・ウィラハディクスマは地味な人物のようだ。オランダが秩序づけたものではあるにせよ、半ばスダの伝統的世界で少年期を過ごしている。もちろん学校を通じてヨーロッパ支配者の文化が深く少年に浸透したことであろう。その支配者文化はスダのメナック社会の秩序を利用し、メナック社会自体も支配者の秩序に支えられていたといえよう。スダ社会の伝統的支配層といっても、植民地下においては決して真の支配者でもなく、中枢でもないことはいままでもない。

彼が軍籍をおくことになったシリワンギ師団は、共和国たる価値を宿命づけられ、さらには反共産党たることをも宿命づけられていた。さらには反ダルル・イスラムでもある。スダ社会に根をもち、スダ社会エリート

であるウマルは、シリワンギに属することによって、国家中枢の価値(たとえ擬制的なものであれ)に、比較的容易に移行できたのではないか。なぜならば、スダ社会の中枢そのものが、これまでみてきたように、擬制的中枢だったからであり、真の中枢を形成しえなかったからではないか。“敬虔なイスラム”という命題の下に“反共産党”の価値を生ぜしめ、メナックや墓参りという価値の下に“反ダルル・イスラム”たりうるというスダ社会の二重的性格こそが、スダ社会やスダ人を、国のレベルできわだたせぬ要因になっているのかもしれない。したがって、自明のことだが、スダはジャワでもスマトラでもない。また今日の時代にあってはジャカルタでも東ティモールでもないのである。

スダ語につきのような諺がある。

Basa mah teu kudu dibeuili (ことばは買う必要がない)。

これは、人に対して失礼にあたらぬ丁寧な (lēmēs) ことばというものは、お金を出して買えるものではない、だからよく学んで習得しなさいという意味である。だが、かつてのメナックやその近くにいた人びと(教員、宗教指導者など)は別にして、多くのカネも財産もない人びとにとっては、lēmēs なことばの世界に近づくのは、それほど容易なことではない。Lēmēs なことばを使えない人びと、プリアンガンの〈洗練された〉スダ語を使えない人びとは kasar だと陰口をきかれて差別される。チレボンやバンテンなど北海岸の人びとは、そもそも中枢部スダ社会の周辺人であると位置づけられる。メナックから遠い人びと、町から遠くに住む人びとは urang dusun, urang kampung (田舎者) と陰でいわれ軽蔑される。

だが、こうした中枢部から軽蔑されたり、馬鹿にされたりする民衆のなかには、つねに象徴的な人気者が存在する。スダ社会の人

気者はいまでもカバヤン Kabayan である。カバヤンがいつごろから登場したかは分からない。すでに何百年も昔からいたという人もいる。つい最近も映画に登場したり、カセット・テープに出演したりしている。カバヤンはユーモラスであることによって、民衆の憂さを晴らしてくれる。「馬鹿」を演ずることによって、人びとを安心させてくれる。いつも貧しいことによって、やはり人びとに安心感を与える。だが、ときに権威や富がない居直りと、機智を働かせることによって権力者からかい、愚弄もする。このことに人びとは喝采を送る。彼は不品行だし、猥雑だし、粗野 kasar である。だからこそ人気者なのだ。

カバヤン譚 Carita Kabayan, Dongeng Si Kabayan は無数にある。オランダ人、オランダ支配をからかうこと、アラブ人高利貸をからかうこと、日本の軍人を冷笑すること、宗教指導者をひやかすこと、メナックにあこがれるが決して実現しないこと、ジャワ人をおとしめること、……要するにスンダ民衆の不満や憂さを晴らしは何でもテーマになるのである。三つのカバヤン譚を紹介しよう。

「カバヤン夢をみる」

カバヤンの義父は夢占いを信じている。カバヤンは河口近くでマンディ（沐浴）をした夢をみたと言った。

「それは、お前が判事になれるという夢だ」と義父はいう。

「いや、河口近くじゃなくて、もうちょっと上流だった」とカバヤン。

「そんならウェダナになれるよ。」

「もう少し川上だったみたいだ。」

「そいじゃパティ Pati 様だ。」

「もうちょっと上。」

「ブパティ（県長）様だぞ。」

「もっと上だとしたら？」

「虎に食われちゃうさ。」

「じゃあ俺がマンディしてたのはブパテ

ィのそばだよ！」

「カバヤン、ハジになる」

ハジ（メッカ巡礼者）の優雅な生活をみながら、カバヤンもある日、ハジにならんと決意した。ハジはどこの家でも、大そうご馳走されることを知っていたので、カバヤンはハジに変装し、ご馳走にありつこうと思いついたのだ。メッカに行くカネなどあろうはずがないにわかハジである。ハジになりすましたカバヤンは、義父の家を訪れ、まんまと鳥肉にありつくことができた。義父は怒り、こんどは何と自分がハジに化けて、カバヤンの家に来た。カバヤンの家には家具もなければ食べものもない。恥じたカバヤン、女房を呼び「義父さんの家に山羊がいる。あれを殺してハジ様に差しあげよう」と大声でいう。義父はそれを聞いて大あわて。しゃっぽを脱いで逃げ帰った。

「カバヤンとジャワの人」

ある時、カバヤンはジャワ人に呼ばれた。食卓には野菜とサンバルがあり、ジャワ人の主人は「これはサンバルです。召しあがって下さい。こちらはジャンガン（ジャワ語で野菜、インドネシア語で『いけない』の意味）です」と、カバヤンにいった。ジャワ語を知らない彼はジャンガンをインドネシア語の「いけない」という意味と思い、野菜を食べず、ただただ涙を流しながら、辛い香辛料だけ食べた。

別のある時、カバヤンの家にジャワ人が来た。この客はカバヤンに商売の資金を提供してくれるというので、彼は下へもおかぬもてなしをした。ジャワ人は甘いものが好きなので、カバヤンはお茶にたっぷり砂糖を入れ、なお「フントゥ・アミス？」（甘くありませんか？）とスンダ語で尋ね

た。アミスというのはジャワ語で「魚臭い」という意味なので、ジャワ人は、コップをとりあげ、匂いを嗅ぎ「いいえ」と答えた。カバヤンは客の機嫌をそこねては大変、と考え、なおも砂糖を足し、また「フロントゥ・アミス？」と尋ねる。客はまた「いいえ」と答える。こんなことを繰り返していると、ついにコップは砂糖だらけ。客はからかわれたと思い、怒って帰ってしまった。

カバヤンたちの住む世界は *lēmēs* なスンダ語の世界ではない。エライさんに精一杯 *lēmēs* なことばを使おうと努力するものの、つつい間違え冷や汗をかくことになる。Abdi nēda (私はいただく) というべきところ、abdi tuang (私は召しあがる) などになってしまう。せっかくの *lēmēs* への努力が、結果として kasar につながり、kampung (田舎臭さ) へと押しやられてしまう。だからこそ、スンダ周辺世界ではカバヤンのような人物を準備しなければならないのである。カバヤンが歯向かったり、茶化したりする相手は、オランダ植民地主義であり、貴族たちであり、みやこのある町 dayeuh であり、日本軍人である。最近では、「開発」の象徴たるビマス計画にも、その刃が向けられている (たとえば Group Santai “Jenaka Parahiangan” [1980 (?)])。カバヤンが日々暮らしているのは地理的スンダである。彼が不満に思い、歯ぎしりし、歯向かってゆく相手も主要には文化総体としてのスンダかもしれない。だが、その日日の暮らし、歯ぎしりの中味は普遍性を帯びたものである。ただの人間という意味において。

独立後40年近い日々が過ぎた。強い国家統一の意思と施策、さらには、この十数年のモノ(商品)とテクノロジーによる「開発」、これらは、ジャワやオランダというかつての中枢以上に、強力な中枢を形成してきている。

ジャカルタは、モノとテクノロジーを外側の中枢から移入する橋頭堡としての役割を、ますます高めている。ジャカルタをとり巻くスンダ世界は、逆にジャカルタによって浸潤されつつある。

「スンダ世界の個性(アイデンティティ)は、いまやなくなってしまった。スンダの人びと(Ki Sunda)としての誇りもなくなってしまった。たとえば、サネント Sanento 博士が報告したように、バンドン工科大学 ITB のスンダ人学生のなかには、スンダ族たることを語りたくもなく、認めたくもない者すらいるというではないか」[Panitia Pelaksana Pasamoan Kebudayaan Daerah Jawa Barat 1982: 115]。

こういう嘆きがスンダ人長老のなかから聞かれるのも無理はない。それだけ急速な「開発」が進展しているのである。ただ問題なのは、強力な、外力に多分に依存した、上からの「開発」が、多様な地方文化、さまざまな人びとの、さまざまな営みを、ローラーで押しつぶすように圧殺してゆくことである。有機的な国民統合とかけ離れた、モノによる支配原理こそが貫徹しているのである。

スンダの古き社会に青い鳥がいたわけではない。ことばに呪縛され、ことばを支配の道具としても利用した植民地封建社会がそこにはあった。にもかかわらず、新たなモノによる支配原理を呪う場合、のっぺりした顔しかもたぬ「スンダ世界」というものが立脚点とされる皮肉がある。その「スンダ世界」が擬制的仮面を剥ぎ、個別・周辺世界であるが〈人間〉という一点において普遍世界でもあるということに強力に主張したとき、あるいは真のスンダ世界のアイデンティティが確立されるのではないだろうか。スンダのコーラス・グループであるビンボー Bimbo は、この時代のスンダとインドネシア、そして〈人間〉を琴と笛に乗せて、スンダ語で、ス

ダのメロディーで、うたっている [Bimbo 1977]。

Ceuk Emil Salim

Tuh, tuh di ditu

Lembur kuring Pajajaran

Ceuk juru pantun, lembur kuring teh subur

Ceuk juru pantun, lembur kuring teh ma'mur

Tara kurang sandang pangan

Henteu susah kahirupan

Pajajaran kari ngaran

Subur ma'mur ukur lamunan

Tuh, tuh di ditu

Lembur kuring Jawa Barat

Ceuk Emil Salim, Ayeuna miskin ku leuweung

Ceuk Emil Salim, estuning matak keueung

Hayang repeh bari rapih

Ulah rapih bari ripuh

Deudeuh teuing Jawa Barat

Beak taun beuki walurat

Tuh, tuh di ditu

Lemah cai Indonesia

Urang wujudkeun nagara nu santosa

Urang wujudkeun nagara nu raharja

Subur ma'mur gemah ripah

Eusi nagri suka bungah

Indonesia nu raharja

Gumantung urang sadaya

エミル・サリムがいうことにか¹³⁾

13) エミル・サリム Emil Salim は、スハルト政権での有力な経済閣僚。とくに環境問題への関心が強いといわれ、1978~1983年まで開発・環境監察国務相、現在は人口問題・環境担当の国務相である。

ほら、ほら、あそこ

わがふるさと、パジャジャランよ

吟遊詩人のいうことにか、わがふるさとは肥えている

吟遊詩人のいうことにか、わがふるさとは栄えてる

食べものも着るものも足りている

パジャジャランの残影

肥え栄えるなんて幻想さ

ほら、ほら、あそこ

わがふるさと、西ジャワよ

エミル・サリムがいうことにか、いまや森が危機に瀕してる

エミル・サリムがいうことにか、ほんにとっても恐ろしい

静かで安らかな暮らしがしたい

苦しいのにきれいなものばかり着るな

ああ、かわいそうな西ジャワよ

年とともに苦しみが増す

ほら、ほら、あそこ

わが祖国、土と水のインドネシアよ

人びとは平和な国を花咲かせ

人びとは豊かな国を花咲かせ

肥え栄え、豊かで生き活きと

国じゅう喜びに満ちあふれ

豊かな国インドネシアの実現は

私たちすべてにかかっている

参 考 文 献

- Adiwilaga, Anwas. 1975. Beberapa Catatan tentang Penulisan Sejarah Jawa Barat sekitar Permasalahannya. In *Sejarah Jawa Barat: Sekitar Permasalahannya*, edited by Atja, pp. 52-72. Bandung: Proyek Penunjang Peningkatan Kebudayaan Nasional Propinsi Jawa Barat Bandung.
- Ali, Moh.; Kartodirdjo, Sartono; Abdullah, Taufik; Adiwilaga, Anwas; Soewargana, Oejeng; and Surjomihardjo, Abdurrachman. 1975. *Sejarah*

- Jawa Barat: Pandangan Filsafat Sejarah*. Bandung: Proyek Penunjang Peningkatan Kebudayaan Nasional Propinsi Jawa Barat.
- Anwar, Khaidir. 1983. *Indonesian: The Development and Use of a National Language*. Yogyakarta: Gadjah Mada University Press.
- Asmar, Teguh; Rohaedi, Ayat; Danasasmita, Saleh; and Ekadjati, S. Edi. 1975. *Sedjarah Jawa Barat: Dari Masa Pra-Sedjarah Hingga Masa Penyebaran Agama Islam*. Bandung: Proyek Penunjang Peningkatan Kebudayaan Nasional Propinsi Jawa Barat.
- Atmamihardja, Ma'mun. 1958. *Sadjarah Sunda*. Bandung-Jakarta: Ganaco N. V.
- Basoeni, Didin D. 1975. Dari Kata Bendung Jadi Kota Bandung. *Pikiran Rakyat*. April 1, 1975.
- Benda, Harry J. 1963. Kontinuitas dan Perubahan dalam Islam di Indonesia. In *Islam di Indonesia*, edited by Taufik Abdullah, pp. 33-54. Translated by Mien Jobhaar. Jakarta: Tin-tamas.
- Castles, Lance. 1967. The Ethnic Profil of Djakarta. *Indonesia* 3(April): 153-204.
- Dijk, C. Van. 1981. *Rebellion under the Banner of Islam: The Darul Islam in Indonesia*. The Hague: Martinus Nijhoff.
- Feith, Herbert; and Castles, Lance. 1970. *Indonesian Political Thinking 1945-1965*. Ithaca: Cornell University Press.
- Finch, Susan; and Lev, Daniel S. 1965. *Republic of Indonesia Cabinets 1945-1965*. Interim Report Series, Modern Indonesia Project. Ithaca: Cornell University.
- 後藤乾一. 1972. 「インドネシアの地方政治——西部ジャワの事例」『アジア経済』13(6): 16-42.
- ハルソヨ. 1980. 「スンダの文化」『インドネシアの諸民族と文化』クンチャラニングラット(編). 加藤剛; 土屋健治; 白石隆(訳). 東京: めこん. (原著 Harsojo. 1971. *Kebudajaan Sunda*. In *Manusia dan Kebudajaan Indonesia*, edited by Koentjaraningrat, pp. 305-325. Djakarta: Penerbit Djambatan.)
- Herdiana, Eddy. 1980. *Upacara Perkawinan Adat Sunda*. Bandung: PT. Suwarnadwipa.
- Hidayat; Suryawikarta, Bey; and Suwarna, Urip. 1978. *Studi Penentuan Jenis Lapangan Usaha bagi Tukang Becak di Kotamadya Bandung*. Bandung: Kerjasama Badan Perencanaan Pembangunan Kota Daerah Propinsi Daerah Tingkat I Jawa Barat dan Pusat Penelitian Ekonomi dan Sumber Daya Manusia Fakultas Ekonomi Universitas Padjadjaran.
- Hugo, Graeme J. 1978. *Population Mobility in West Java*. Yogyakarta: Gajah Mada University Press.
- Indonesia, Kementrian Penerangan. 1953. *Republik Indonesia: Propinsi Djawa Barat*. Djakarta: Kementrian Penerangan.
- Iskar, Soehendra; and Didi, Suryadi. 1977. *Sasakala Sangkuriang: Sebuah Penelitian Lapangan Folkloristik dari Daerah Sumedang*. Bandung: Lembaga Kebudayaan Universitas Padjadjaran.
- Kartodirdjo, Sartono. 1966. *The Peasants' Revolt of Banten in 1888*. The Hague: Martinus Nijhoff.
- . 1973. *Protest Movements in Rural Java*. Kuala Lumpur: Oxford University Press.
- Kutojo, Sutrisno; and Safwan, Mardanas. 1975. *Riwayat Hidup dan Perjuangan Oto Iskandar Dinata*. Jakarta: Mutiara.
- Legge, John D. 1957. *Problems of Regional Autonomy in Contemporary Indonesia*. Interim Report Series, Modern Indonesia Project. Ithaca: Cornell University.
- ルビス, モフタル. 1982. 『インドネシア人の自画像——その過去・現在・未来』粕谷茂; 高取茂(訳). 東京: 井村文化事業社. (原著 Lubis, Mochtar. 1978. *Bangsa Indonesia*. Jakarta: Yayasan Idayu. Lubis, Mochtar. 1980. *Manusia Indonesia: Sebuah Petanggungjawaban*. Jakarta: Yayasan Idayu.)
- Lubis, Mochtar. 1983. *The Indonesian Dilemma*. Translated by F. Lamoureux. Singapore: Graham Brash.
- 村井吉敬. 1978. 『スンダ生活誌——変動のインドネシア社会』東京: 日本放送出版協会.
- . 1983. 「バンドン——西ジャワ・プリアンガンの町の生成と発展」『東南アジア研究』21(1): 29-46.
- Nederlandsch Indië, Centraal Kantoor voor Statistiek. 1940. *Statistisch Zakboekje voor Nederlandsch-Indië 1940*. Batavia: Centraal Kantoor voor Statistiek, Departement van Economische Zaken.
- Palmer, Andrea Wilcox. 1967. Situradja: A Village in Highland Priangan. In *Villages in Indonesia*, edited by Koentjaraningrat, pp. 299-325. Ithaca: Cornell University Press.
- Panitia Pelaksana Pasamoan Kebudayaan Daerah Jawa Barat. 1982. *Rumusan Pasamoan Kebudayaan Daerah Jawa Barat*. Bandung.
- Prawirasuganda, A. 1964. *Upatjara Adat di*

- Pasundan*. Bandung: Sumur Bandung.
 Redaksi Tempo. 1983a. Dan Kemudian Dipilihlah Umar. *Tempo* 13(1), Mar. 5, 1983: 12-15.
 ————. 1983b. Orang Bersih dari Sumedang. *Tempo* 13(1), Mar. 5, 1983: 15-16.
 Ricklefs, M. C. 1981. *A History of Modern Indonesia*. London: Macmillan Press.
 Roeder, O. G.; and Mahmud, Mahiddin. 1980. *Who's Who in Indonesia*. Jakarta: Gunung Agung.
 Rosidi, Ajip. 1977. *Si Kabayan dan Beberapa Dongeng Sunda Lainnya*. Jakarta: Gunung Agung.
 Satjadibrata, R. 1950. *Kamoes Soenda-Indonesia*. Djakarta: Balai Poestaka.
 ————. 1954. *Kamus Basa Sunda*. Djakarta: Perpustakaan Perguruan Kementerian P.P. dan K.
 Schrieke, Bertram. 1956. *Indonesian Sociological Studies*. Vol. 2. The Hague; Bandung: W. van Hoeve.
 Sedjarah Militer Kodam VI Siliwangi. 1968. *Siliwangi dari Masa ke Masa*. Jakarta: Fakta Mahjuma.
 Soepandi, Atik; and Enoch Atmadibrata. 1976. *Khasanah Kesenian Daerah Jawa-Barat*. Bandung: Pelita Masa.
 スマントリ, イワ・クスマ. 1975. 『インドネシア民族主義の源流——イワ・クスマ・スマントリ自伝』後藤乾一(訳). 東京: 早稲田大学出版部. (原著 Sumantri, Iwa Kusuma. 1971. *Autobiography dari Prof. Iwa Kusuma Sumantri*. (Stencil))
 Sumartana, Anton De. 1981. *Kumpulan Puisi: Senandung Kota Bandung*. Bandung: Swawedar 69.
 Svensson, Thommy. 1983. Peasants and Politics in Early Twentieth-century West Java. In *Indonesia and Malaysia: Scandinavian Studies in Contemporary Society*, edited by T. Svensson and P. Sørensen, pp. 75-138. London; Malmö: Curzon Press.
 Tim Penyusun Monografi Daerah Jawa Barat. 1977. *Monografi Daerah Jawa Barat*. Jakarta: Proyek Pengembangan Media Kebudayaan Direktorat Jenderal Kebudayaan, Departemen Pendidikan Dan Kebudayaan.
 Tim Redaksi Majalah Tempo. 1981. *Apa dan Siapa Sejumlah orang Indonesia 1981-1982*. Jakarta: Grafitipers.
 土屋健治. 1983. 「ジョクジャカルタ——中部ジャワにおけるくみやこ」の成立と展開」『東南アジア研究』21(1): 17-28.
 Wertheim, W. F. 1956. *Indonesian Society in Transition: A Study of Social Change*. Bandung: Sumur Bandung.
 Zain, Sutan Mohammad. 1960. *Kamus Modern Bahasa Indonesia*. Djakarta: Penerbit Grafica Djakarta.
- [カセット・テープ]
 Bimbo. 1977. *Pop Sunda Kiwari*. Jakarta: Irama Tara.
 Group Santai "Jenaka Parahiangan". 1980(?). *Si Kabayan: Laporan Indah*. Jakarta: Eterna Tunggal Indonesia.
 Kasino; Dono; Nanu; and Hendro. 1980(?). *Waringin Kopi Prambors*. Jakarta: P. T. Pramaqua.